



喧騒に対する結界としての暖簾。夏季は麻、冬季は綿を使い分け、無機質な空港に四季の変化をもたらす。

## カフェM 北海道の美学を表現する立体的な庭

新千歳空港にオープンした、北海道で複数店舗を展開するカフェの新店舗。多くの海外ゲストを迎える北の玄関口において、事業者が大切にしてきた日本の美学や伝統を表現する。加えて、事業者の原点であった小さな茶室「月庵」を現代に呼び起こす。日本の美学や伝統の正統性を追い求めるならば、明治以降に開拓された若い北海道には不利である一方、北海道という亜寒帯の大地の視点からそれらを自由に解釈し表現する道もまた開かれている。

空港の喧騒に対する結界として間口いっぱいに暖簾を設け、喫茶スペースには茶室を核に、神棚、流木、炉を備えた石のカウンターといった個性の強いモノたちを立体的に配置することで、互いを引き立て合いながらひとつの風景のなかに共存させる。素材として用いた北海道の木や石は、異素材と組み合わせることで新たな表情を引き出す。カウンターには柔らかないページュの美瑛軟石を設え、その隣には黒皮を残した須賀川石を沓脱石として置く。茶室に用いた北山の磨丸太と躰口に位置する香節(コブシ)の対比。あるいは伊勢の宮大工が手掛けた神棚と、北海道の自然が作り出した流木。こうした素材の緊張感ある関係性により、モノに込められた思いや素材が経た時間、無作為の自然といった時間的・空間的な重層性を感じさせる場となる。白く抽象的な空間は雪景色と無関係ではあるまい。



- 1. 物販スペース
  - 2. 喫茶スペース
  - 3. 月庵
  - 4. テイクアウトカウンター
  - 5. 厨房
- 平面図 S=1/250



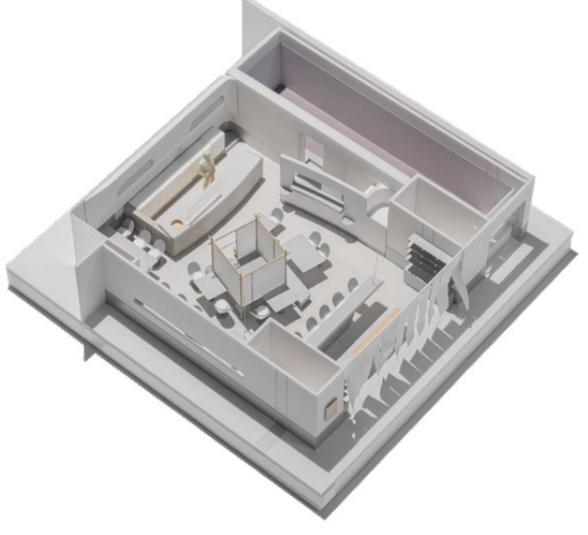
正面に美瑛軟石のカウンター。石材は解体した石蔵から採取。



香節(コブシ)は北海道の春を告げる樹. 宮大工の手によりあえて神祕的な貫・楔のディテールで茶室を構成.



茶室は北山の磨き丸太と香節の柱・桁の貫で構成され, 客席として利用できる.



茶室を角度をもって配置することで, 暖簾をくぐって茶室へ至る道のみならず, すべての席にそれぞれ固有のシーケンスと体験が与えられた.



北海道の川で採取された流木を, 曲線を描く壁のニッチに配置, 左手レジカウンターの機器はすべてアルミのボックスに収納.



月庵の窓より覗く. 畳には金魚の刺繍し水面を暗喩.



多様な座席. テーブルの脚が邪魔にならないよう, テーブルは天井から吊っている.